

● 論説文論評

今年のテーマは「新しい教科」を考えてみるというものでした。学校生活になじみが深いテーマだったためか、例年以上の応募が集まったようです。普段から「こんな授業があったらいいな」と考えている人がかなりいるということなののでしょうか。

優秀賞は『『聞き取り科』を作ろう』に輝きました。狙いは「できるだけ多くの人と直接会話する機会を持ち、相手の話をしっかり聞き取ること」。なぜなら、「普段、同世代の友達同士のコミュニケーションに偏っている中高生にとって、さまざまなタイプの相手と意思疎通を図ることは考えている以上に難しいが、そこから多くのことを学べるだろう」という現状と問題点を指摘しています。何かを提案する上で、なぜそういう提案をするのかを明確に挙げることは、論説文には不可欠です。

この作品では、さらに具体的な内容についても「例えば」として、老人ホームや小学校、大学などの留学生センター、近隣の店舗や会社などにも協力を呼びかけて「お話し相手ボランティア」を募集する——と提案しています。具体的な例を挙げることによって、この提案内容がより「伝わりやすく」なります。受け手側にきちんと「聞き取って」もらえるには、伝え手側の「伝える力」も重要です。聞き取る力とともに「伝える力」も一緒に考えると、よりいいコミュニケーションのサイクルができるでしょう。また、「先生は客観的なアドバイスを」や「評価はつけない」などの評価基準まで提案している点も、具体的に教科として運営する上で重要なポイントです。こうした点もイメージしやすい提案となっていました。

「聞き取る力」は、私たち新聞記者にとっても普段から意識している、重要な力です。単に「耳を澄ます」とか「録音して聞き返す」とかいうだけの問題ではありません。取材では毎日、いろんな立場の、中にはこれまで接したことがない世界の人たちのお話を聞きます。多くがその道のプロで、ニュースになるような何かを持っている人たちですから、限られた時間でどれほど内容が濃い、突っ込んだ質問ができるかが勝負です。内容がある質問をするためには、事前に本を読んだり、最近の発言や取り巻く環境を調べたりしておきます。聞き取るためには「調べる力」も必要になるのです。うまくいくと、想像もしていなかった面白い経験談が聞けることもあります。SNSやネットを見れば、膨大な情報が簡単に入ってくる時代ですが、だからこそ、その中にある「真実」や「重要なこと」を見抜く力が重要です。「聞き取り科」によって、そうした力が身につくといいですね。

奨励賞は「我が街愛する科」と「未来の日本を作る」でした。自分が住んでいる街を調べると、いろんな特徴が見えてきます。中には、他の街と比べても優れた、自慢ができるようなものがあつたり、珍しい特産品があつたり。「自分の今いる（街の）文化、環境をベースに、様々な文化を知るからこそ見えてくるものは多い」はずです。まずは、それを知ることがこの新しい教科の狙いです。論文の中では海外と日本の習慣の違いや、関東地方

と京都での「ところてん」に付ける風味の違いなど、実に分かりやすくユーモアに富んだ例を挙げてくれました。こうした、誰にも分かるような話を折り込むことで、どうしても堅く、理屈っぽくなりがちな論説文が身近な存在になってきます。まずは、「読む人が読みたくなるような話」を盛りこむことも必要です。

そういう意味で、最も目を引いたのが「未来の日本の作る教科」として、「恋愛についての授業を作りたい」という提言でした。「日本では出生率が年々下がってきている。少子高齢化が影響しているのも事実だが、私は若者の恋愛に対する意識の低さが一番の原因だと思う」。なるほど。面白い指摘ですね。思っても、なかなか論説文にはできない提案ですが、それをきちんとまとめてくれました。意外性ばかりを追求すると珍案、奇案な提案になってしまいますが、「他の人はあまり言わないけど、結構、真実ついているな」と思うようなユニークな提案は、論説文では十分にあり、です。具体的な授業の内容として「共学の場合、相手を誘う練習や相手の気持ちを理解するための授業」を。「女子校や男子校の場合、課外授業としてそれぞれ相手の学校に行き、誘い方や話しかけ方、きっかけ作りを学ぶための授業」をと。なぜなら「恋愛について学校は何も教えてくれない。だから恋愛したいと思う人が減る、だからこそ恋愛についての授業を行えば、少しでも日本の未来が明るくなる……」という論旨です。どうですか。中には説得力を感じた人もいるかもしれません。「そんなの先生が教えることか」と思う人もいるでしょう。議論がさらに広がる意味でも、ユニークな提案でした。

ただ、少子高齢化にはほかにもいろんな原因や理由があるので、そういう「第三の視点」に触れることも必要です。本人の強い思い込みばかりで話が進んでしまうと、異なる考えの人は付いていけなくなってしまいます。そこに客観的な視点が入ることで、論説文が冷静なものになります。一度書き上げた段階で、「独りよがりの論旨」になっていないかどうか、冷静な目で自分の主張を点検してみることを忘れないでください。

ほか、「議論」や「ディスカッション」「なりたい職業」などをテーマにした力作もありました。内容は濃かったのですが、すでに一部の学校では導入が進んでいるような話なので、新鮮みが薄かった。こうした話の場合は、もっと現実の失敗例や困難な具体例を挙げながら、そこから考えた、より深い方法、手段を提案してみてください。そうすることで難しくなりがちな論説文が、より身近な存在になってきます。